

法華義疏の一特徴

望 月 一 憲

序論 自由にして大胆な自主的態度

私はかつて昭和四十年八月二十八日、北海道大学において開催された日本宗教学会において、「法華義疏の特徴について」と題し、『法華義疏』なる書物を「筆者不明の一古書」と仮定し純文献学的に研究し直した結果、抽出することのできる特徴として、「自由にして大胆な自主的態度」なるものを指摘した。そして、その思想上における最も顕著な特徴として、人間救済の慈悲の徹底をあげ、一大乗をあげて、次のようにいつた。

思想上における最も顕著な特徴は、人間救済の慈悲の徹底ということであります。「慈悲」を解しまして、「慈」はすなわち「与樂」であり、「悲」はすなわち「拔苦」であるといたしておりますが、その極は如来出世の本懷たる法華一大乗の開顯となるのであります。經文には「一仏乘」という、なお、屢々用いられる言葉に、「一乘」の語あり、「大乘」の語あり、その他、これに類する言葉はございますが、このように、大乘と熟しまして、この意味に

活用されるにいたしましたのは、実に本義疏をもって嚆矢とするといえるのであります。この一大乗の新しい言葉の活用は、まさしく本義疏の新しい發明であり發揮であると考えます。文学者島崎藤村は、「言葉は生命である」と申しました。「新しい言葉は新しい生命なり」と申しております。本書に磅礴する徹底した慈悲救済の一念は、ついに一大乗の新しい言葉の活用となつて、その思想は法華思想史上に進一歩の足跡をかたく印するに至つたと考えるものであります。

この「慈悲救済思想の徹底」について、更に今一歩、突き進んだ考察を加え、ここに新しく研究発表を試みたい。

本論 經典本文の転回釈

一 慈悲救済思想の徹底

——「常好坐禪」の転回釈——

『法華義疏』には、つとに花山信勝博士によつて指摘せられた「安樂行品」の「常好坐禪」の転回釈がある。

『法華經』の「安樂行品」には、菩薩の安住すべき「四安樂行」

が説かれ、その第一の「身安樂行」において菩薩の「行処」と

「親近処」とが示されているのであるが、その「親近処」に「初めの親近処」と「第二の親近処」とを述べている。そして、その「初めの親近処」と名づけるものに十種があげられていて、その第一から第九までは「不親近の境」であるが、その第十は「常に坐禪を好みて閑かなる処に在りて其の心を修し摂めよ」というのであるから、「底に親近すべき境」である。ところが、『義疏』は、ここにおいて特に異を立てて、「十不親近常好坐少乘禪師」と經典の本文を転回しての解釈を施しているのである。なお、この長行は偈頌においても繰り返され、それも明らかに「親近処」を示したものであるが、ここでも『義疏』は、

但從顛倒分別以下二行偈、頌上常好坐禪。初一句明好禪之由、次一句正頌上常好坐禪。言由有顛倒分別心故、捨此就彼山間常好坐禪。然則何暇弘通此經於世間。故知常好坐禪猶慮入不親近境。本義云、此二行非頌常好坐禪。從顛倒分別以下五行偈皆頌上不親近実法有。顛倒分別一行、但舉非顛倒是。

といつて、断乎、強引に無理な転回釈を施して憚らない。

そして、この転回釈こそは「人間救済の慈悲の徹底」として「実に自由にして大胆な自主的態度」のピークを示すものといふことができるのであるが、しかしながら、これは今一つの特徴である如來に絶対帰依する筆者の釈風と相矛盾し衝突するところのものである。

二 今一つの特徴

—— 帰依信解の立場 ——

「如來は是れ敬うべきの極にして、衆生は是れ敬を作すの主」^③「衆生と仏と天地別有り」^④と畏み、本義の説に対してすら「愚心及び難し」^⑤と自称するもの、これ『義疏』の筆者である。そして、この顕著な特徴は、「方便品」における「五人退去」の解釈において、次のように明瞭に表現せられているのである。

夫聖人所為非無因縁、必因遣可利故然也。即所謂下足攀足皆從道場來也。^⑥

なお、「体解」^⑦「体信」^⑧という言葉が『法華義疏』には出てくるのであるが、この「帰依信解の立場」こそ『義疏』の筆者の今一つの顕著な特徴であるといふことができる。

したがつて、この両者の釈風の相違というものは、むしろ筆者を異にすると解することの方が自然なほどであつて「如來と我れとは天地別あり」「如來は是れ敬すべきの極」となりと畏み、「聖人の所為」は必ず凡慮の予想外のものたるべしとし、常に「愚心及び難し」と自称する筆者にして、なお、かつ、如來金口の經文であると心から畏んでいるこの本文をみだりに転回して、如來の慈悲はかくあるべしと、自ら断じて憚らざるがごときは、余ほど何か特殊格別の由來なくしては到底かなわざるところのものであると考えられる。

三 先哲の英断、後人これを仰いでためるうことなし
 そのこと久しく疑問のままだに、その所以を解くに由なく、
 荏苒、時を過ぐすのやむなきままであつたが、幸にも先年
 『勝鬘經義疏』の本義なるものが明らかとなるに及んで、同
 種同様の転回釈がすでに中国の註釈書において実施されてい
 ることが判明するにいたつたのである。

それは、先年、京都大学の人文科学研究所の藤枝晃教授を
 主班とする研究グループによつて、その本義が明らかとなつ
 たことをいうのであつて、学界周知のことである。

ここにおいてか、先蹤すでに大陸にあり、しかも、仏陀絶
 對の慈悲を仰げば、理まことに然りである、ということにな
 るのであるから、如来に帰依し心から畏む筆者であつて、な
 お、かつ、如来の慈悲はかくあるべしと、いささかも躊躇す
 ることなく、ひじような確信をもつて、この転回釈を敢えて
 することができたのである、と考えられるのである。

私が「先哲の英断、後人これを仰いでためるうことなし」
 と称する所以である。

結論 釈尊とその慈悲を同じうす

さて、「法華義疏と勝鬘經義疏との關係」については、さき
 に昭和四十二年十一月十二日、東京大学における史学会の日
 本史部会の研究発表において、同じく「筆者不明の古文献」
 という原点に立ち直つての純文献学的な研究成果として、

「兩者の著者は同一人なり」と断することができているので
 ある。

「行善の義、本と帰依に在り」とは『勝鬘經義疏』におい
 て特筆するところであるが、実は『法華經』を体解し体信す
 るにまさる成仏の原因としての「行善」はないのである。ま
 た、『法華義疏』には、「今、大機を發して此の法華を聞く者
 は、正しく三品の外凡実行の類に在る也」という言葉が出て
 くる。ここに「三品」というのは上根・中根・下根の三種で
 あり、「外凡」というのは内凡の三賢に対して十信の位の凡
 夫をいうのであるから、「外凡実行の類」とは筆者自らをも
 含むところのものである。なお『法華義疏』には「外凡の人」
 という表現も出てくる。

すなわち、帰依行善の凡夫、ここに先哲の英断を媒介とす
 ることによつて、ついに釈尊絶對の慈悲を体得するに至つた
 わけである。かくて、一たび釈尊絶對の慈悲の光りが帰依行
 善の凡夫の心に点火された以上、火はあくまでも火であつて、
 火の本質にいささかの変わりもない。私が「仏陀の慈悲とその
 光りを同じうする者がこの『義疏』の筆者であるから、聖人
 この土に出現したこと、また、疑うべからざることである」
 という所以である。

このようにみてくれば、ここに私は「法華義疏の一特徴」
 と題したが、その「一特徴」とは一つの特徴であつて、同時

にその特徴なるものは実は『法華義疏』が示す第一の特徴であるということが出来る。ここに新しい研究発表として改めて報告する所以である。

余論 派生的な問題

一 成疏の要員は複數にあらず

なお、上來考察してきた転回釈は、いわば孤高・単独の卓見英断であつて、もし複數多數の共同作業ならば、研究討議の結果、自然に穩健妥當の線に落ちつくべきであり、このようにひんまげた解釈というものは到底は認され得べくもないのである。

したがつて、最近、東京大学教授井上光貞博士が「三經義疏の成立」⁽⁹⁾を論じて学団グループの研究成果たることを想定しているが、かかる設定は上述した地道な文献学的な具体的な内容研究からは到底考えられないところである。

二 形容詞「破天荒な」の削除

次に念の爲めに付け加える。私は昭和四十三年に『勝鬘經義疏』の転回釈なるものを「まことに大胆にして破天荒な転回釈である」と申したが、その後において、先ほど述べたように『勝鬘經義疏』の本義が発見せられ、その「本義」にすでに同様の転回釈のあることが判明したのであるから、当然この形容詞は取り去らなければならぬ。

しかしながら、このような転回釈は、古註において他にこ

れを見ることができないのであつて、中国においてすでに特異の見解であつたといわねばならない。そして、この中国先匠の異説を敢えて採択しておるところにこそ、われわれは義疏の筆者の見識を高く評価するものである。何となれば、このように転回する解釈を採択してこそ、仏陀絶対の慈悲の光りは更にその輝きをますからである。

三 外国史料の裏づけ

更に、今、一つ、このような考察が許されるならば、『勝鬘經義疏』の本義の発見は、実に『勝鬘經義疏』の筆者と『法華義疏』の筆者とが同一人たるべきことを示す抜き差しならぬ決め手の一つとなるわけであつて、ここにはからずも法華勝鬘の兩疏を直結せしめる外国史料の裏づけを得た結果となることを、改めて報告するものである。

- 1 『綜合歴史研究』第三卷第一・二号(四三・一一・八)六三頁
- 2 御物本『法華義疏』第四、安樂行品第十三(二七七行—二八一行)
- 3 御物本『法華義疏』第二(二六一・二六二行)
- 4 同(二〇〇行)
- 5 同第一(四一一行)
- 6 同(五三〇・五三二行)
- 7 同(四二四・五行、四三三行)
- 8 同(四三二行)
- 9 『聖德太子研究』第五号(四五・八・二〇)「敦煌本・勝鬘經義疏本義」(古泉円順)参照
- 10 前記『綜合歴史研究』第三卷第一・二号
- 11 御物本『法華義疏』第一(五一一行)
- 12 同(六二三行)
- 13 前記『綜合歴史研究』第三卷第一・二号「法華義疏の思想」九一頁
- 14 『純日本古代史論集』中卷(四七・七・一、吉川弘文館)
- 15 前記『綜合歴史研究』第三卷第一・二号「勝鬘經義疏に関する一考察」五六頁